

## 2024年度 国際日本文化研究センター共同研究会

### <共同研究の目的>

国際日本文化研究センターが最も力を入れているのは、共同研究方式の日本文化研究です。日本文化を研究するためには、関係する個別専門分野ごとの成果が着実に積み重ねられなければなりません。と同時に、専門分野の枠組を越えて、研究者が相互に知見を高めあう場が必要になります。こうした共同研究の場は、総体として日本文化理解の促進に大きな役割を果たすものと考えます。このような観点から学際的な共同研究にウエイトを置いています。

また、日文研の共同研究では、日本と異なる知的伝統にたつ海外の研究者との交流をも重視します。異文化からの視点は研究に新しい展望と成果を与え、また研究のあり方に、よい意味での相対比をもたらします。さらに、国際化の時代を迎えた今日、日本文化研究もまた国際化をはかることで、時代の要請に応えることができるでしょう。

もちろん、日文研の共同研究は、単なる研究成果の交換にとどまるものではありません。専門分野及び知的伝統を異にする研究者たちが研究過程を共有しあうことによって生みだされる創造性、これこそが、日文研の共同研究がめざすところの眼目なのです。

(※奨学生はオブザーバーでの参加となります)

## 口と鼻—人体と外界の接合域の日本文化史

### <研究概要>

「口と鼻」にまつわる日本文化史の共同研究である。新型コロナウイルス感染症のパンデミック下、人類は口と鼻を覆うマスク着用が欠かせなくなった。人間と自然の接触とせめぎ合いは口と鼻で主におきる。本研究では口と鼻を人体と外界の「接合域」ととらえ研究する。生物としての人類は口と鼻から空気・食物・薬剤・薫香料などを摂取する。ウイルス・細菌の受容・遮断・排出も主にこの臓器で行う。ただ、そのありようは時代と地域で様々で、マスク着用行動など公衆衛生上も、口と鼻をめぐる文化的な影響が想像以上に大きい。ポスト/ウイズコロナの状況は、この点を我々に知らしめた。口と鼻をめぐる歴史文化にフォーカスした国際的学際的分析が必要とされている。当然、この種の研究には文理の緩やかな連携が求められる。感染症史、環境史、食文化史、医療人類学、薬学、文学など、文系理系を問わず研究者・文化人を集め、共同研究をするものである。

### <研究代表者>

磯田 道史 国際日本文化研究センター教授

### <本年度研究会開催予定>

3回

## 町とモニュメント：視覚文化史から見た日本の都市計画と記念

### <研究概要>

この共同研究プロジェクトは、都市という人間が住む場所に関わる二つのテーマとその関係を扱う。いかにして都市は記号化／暗号化されて意味を持つようになるか、どのようにその意味が変遷するかを研究する。都市は何らかの命令により作られる場合もあるが、自然発生する場合もある。従って最初のテーマは都市計画となる。都市は時間をかけて何らかの意味のある構造を持つようになる。この共同研究ではそれらを「モニュメント」と呼ぶことにする。それらは宗教的な施設、宮殿や城、公共の施設などかもしれない。あるいは歴史の面影または遺跡や廃墟かもしれない。純粹に何か過去の出来事を記念することを目的に建設されるモニュメントもあれば、逆に、元来の目的がそうでなくとも長く維持されることにより記憶という側面が主な焦点となる場合もある。それらのモニュメントは平面的な、あるいは立体的なものでもあり得る。

このプロジェクトは比較という要素を含む。日本を国際的な文脈の中で比較するためである。

参加者が専門とする時代には制限を設けない。したがって時代的には日本史全体を対象とする。

### <研究代表者>

タイモン スクリーチ 国際日本文化研究センター教授

### <本年度研究会開催予定>

4回

## 胎内から墓場まで—現代における死生観の解明

### <研究概要>

現代社会において、人々は誕生と死をどのように捉えているのだろうか。ほとんどの誕生と死は医療機関で迎えられ、コロナ禍では家族や友人が立ち会うこともできなかった。この共同研究では、誕生と死の現状をフィールドワークの成果や最新の研究から明らかにし、それをもとにさまざまな分野の研究者と議論を重ね死生観を解明していく。人々の意識と、社会規範や慣習、法などとのズレにも注目し、その要因を歴史的な過程を踏まえて考察する。

また Web 空間に広がる人文・社会科学関連のデータを、AI 技術も使いながら分析する新たな研究方法を探索していく。さらに、メタバースなど仮想化技術を視野に入れ、「仮想空間での死」といった派生的な問題についても考える。若手の研究者や関係者にも加わってもらい、人々が命の尊厳を意識しながら、穏やかに生きていける次代の新たな方向を模索していきたい。

### <研究代表者>

安井 眞奈美 国際日本文化研究センター教授

### <本年度研究会開催予定>

4 回

## 「島国・日本」再考：移り変わる姿、意識、心象

### <研究概要>

本研究プロジェクトの目的は、日本を構成する島々（離島）をどのように理解するかということ进行分析するものである。一般的に、日本は「島国」といわれるが、この認識は二つの重要な点を見落としている。第一に、日本を構成する島々に対して、その意味や彷彿させる感情が時間や空間で異なるという点である。第二に、島に対する認識、すなわちその島で構成されている国家の領土の重要性が、住民、地域、階級等などで異なるという点である。

本プロジェクトは、日本における島（離島）に込められた重要性を反映しながら、以下の問題について研究を行う。第一に、政府や一般市民の間に、どれほど国家や国に対する認知が重なり合っているのか、第二に、一見周辺の「微々たる領土」が、政治的・感情的重要性を帯びるのか、そして最後に、島とは単純に国家領土の一部として存在するのか、それとも政治的想像の産物や構成物として理解・機能することは可能なのか、という点を考察する。

### <研究代表者>

エドワード ボイル 国際日本文化研究センター准教授

### <本年度研究会開催予定>

3回

## 日文研所蔵井上哲次郎関係書簡の研究—国民国家の始発と終焉

### <研究概要>

井上哲次郎（1856～1944）は明治期の東京帝国大学を代表する哲学者であった。日文研にはその書簡が140点所蔵されている。本共同研究会では、その書簡の体系的な分析をもとに、日本における国民国家の始まりの姿がどのようなものであったのかを考察する。作業としては、1)井上を中心とする知識人のネットワーク分析、2)国民国家における全体主義と民主主義の関係の考察、3)国民国家における人権と主権の関係の考察を三つの柱として行う。

それらの作業を通して、

- 1)井上が作った知識人のネットワークにおいて、国民国家がどのように構想されたのか、
- 2)そこにおいて民主主義と全体主義はどのように区別されていたのか、あるいはいなかったのか、
- 3)そこでは人権および主権がどのように関係付けられ、国民国家を支えるものとして構想されていたのかを明らかにする。

その結果として、国民国家や民主主義が形骸化する現代の日本社会のあり方を浮き彫りにしたいと考えている。

### <研究代表者>

磯前 順一 国際日本文化研究センター教授

荻田 真司 国際日本文化研究センター共同研究員

### <本年度研究会開催予定>

5回

## 比較のなかの「東アジア」の「近世」

—新しい世界史の認識と構想のために—

### <研究概要>

研究史上、従来からも様々な議論があった東アジアの「近世」（ないしは、初期近代、前近代）と呼ばれる時代について、まずはどのような時代区分において考えるべきか？

次いで、中国、日本、朝鮮・韓国、琉球、ヴェトナムなどの諸地域において、如何なる共通性と普遍性、同時に差異や個別性、特殊性が存するのか？ また、各々の国や地域における「近世」の内実の相違が、通常、近代以降の異なった進み行きに対して、相応の影響を与えたと考えられるが、必ずしも「近代」や「革命」に至るプロセスとしてのみ評価するのではなく、独自の時代である「近世」の特質を検証し、その豊饒さを再評価することを試みたい。

その際には、可能な限り、他の地域や文明圏との比較をも念頭に置いて、世界史的な同時代性についても考えてみたい。こうした検討や考察を通じて、延いては、西洋中心史観とは異なる、在るべき新しい世界史認識を摸索しつつ、構想することを目指したい。

### <研究代表者>

伊東 貴之 国際日本文化研究センター教授

### <本年度研究会開催予定>

5回

## 西洋における日本観と形成と展開

### <研究概要>

16世紀初頭におけるポルトガル人の東南アジア進出に伴い、日本に関する情報が欧州に伝達され始める。16世紀半ば以降、イエズス会士をはじめポルトガル人やスペイン人が、17世紀に入るとオランダ人とイギリス人が、日本に來航するようになる。1641年のオランダ商館の長崎移転以降は欧州諸国の中でオランダだけが日本との交易を維持したが、商館にはドイツ人やスウェーデン人なども勤務していた。18世紀末になると、ロシア船なども日本近海に現れ、1853年のペリー來航以降、欧米諸国の人々が日本に渡航するようになる。これらの日本渡航者は様々な形で日本情報を西洋に伝えた。そのうちの一部の内容は西洋で刊行され、広く普及し、西洋での日本観を形成する土壌となった。本研究会では、16世紀から19世紀にかけての西洋各地において日本情報がどのように伝達され、日本観がどのように形成され変化していったのかを探求する。

### <研究代表者>

クレインス フレデリック 国際日本文化研究センター教授

### <本年度研究会開催予定>

4回



## 「戦後」と「近代」を超えて-1970年代日本の国家と社会

### <研究概要>

「戦後」でひとくくりにされる 1945 年 8 月以降の日本のあゆみのなかで、大きな転機となった時期を挙げるとすれば、1970 年代初頭であろう。2つのニクソン・ショックにともなう戦後国際秩序の動揺、高度経済成長と戦後処理という国家的目標の喪失は、日本の政治・外交の前提条件が融解したことを意味していた。相互依存状況の深化と日本の経済力の増大は、日本の政治外交の範囲を飛躍的に拡大し、多元化・多層化させた。これに続くおよそ 10 年をどのように分析し、理解すればよいのか、日本政治外交史研究はまだ答えを見いだせていない。

この共同研究は、1970 年代の日本の政治、経済、外交・安全保障、社会・文化の諸分野でどのような変化が進行していたのか、日本にはどのような選択肢があり、なにを選択したのか（しなかったのか）を検討する。「戦後」「近代」を再考し、また冷戦後の「失われた 20 年」を理解する手がかりとして、1970 年代という時代を包括的に考察したい。

### <研究代表者>

楠 綾子 国際日本文化研究センター教授

### <本年度研究会開催予定>

4 回

## 文化コモンズの生成と変容

### <研究概要>

1980年代以後の日本では、新自由主義の台頭によって公共サービスが市場原理に基づく商品に変えられてきた。この変革は、公共性という概念を揺さぶり、社会の基盤となる価値観やシステムに大きな影響を及ぼしている。その波は、文化の領域にも届き、文化施設の運営やサービスの内容は、以前とは異なるものになりつつある。文化のソフト面においても、著作権保護範囲の拡大や、ネット空間での行き過ぎた誹謗中傷などによる表現の萎縮が起きている。そうしたなか、文化の公共性と共的側面を再認識するものとして、文化コモンズという概念が注目されている。文化コモンズは、文化的な活動やその産物には公共性があるとの枠組みのもと、その共有や再創造のプロセスを通じて維持・発展する。本研究では、文化コモンズはどのように生成し変容するのかを、具体的な事例をもとに考察し、文化コモンズ学の構築に資することを旨とする。

### <研究代表者>

山田 奨治 国際日本文化研究センター教授

### <本年度研究会開催予定>

4回